

## 2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

|       |                                                                             |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 研究課題  | <b>コロナの流行が日本の若者の容姿に対する意識に与えた影響の解明</b><br>ーマスク着用や WEB 会議の影響による顔の自意識の変化に注目してー |
| キーワード | ①Covid-19、②容姿、③行動変容                                                         |

### 研究者の所属・氏名等

|                                   |                                                                                                                                                               |
|-----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| フリガナ<br>氏 名                       | コミヤ ノゾミ<br>古宮 望美                                                                                                                                              |
| 配付時の所属先・職位等<br>(令和 5 年 4 月 1 日現在) | 千葉商科大学 基盤教育機構 任期制助教                                                                                                                                           |
| 現在の所属先・職位等                        | 東京情報大学 総合情報学部 助教                                                                                                                                              |
| プロフィール                            | 博士(工学)<br>技術経営学修士(専門職)<br><br>2021 年 筑波大学大学院 理工情報生命学術院 システム情報工学研究群 リスク・レジリエンス工学学位 P 博士後期課程早期修了<br>2019 年 芝浦工業大学専門職大学院工学マネジメント研究科修了<br>2017 年 芝浦工業大学工学部通信工学科卒業 |

### 1. 研究の概要

Covid-19 の流行後、対面で実施していた会議や講義の多くがオンライン形式に変わった。その結果、画面に映し出された自分や他人の顔を見る機会が増え、結果として自分の顔に否定的な意識を持つ人が増加したという実態が報告されている(Shauna et al, 2021)。そこで本研究における問題意識を「Covid-19 の流行によって若者に生じた顔に対する自意識の変化が、今後の彼らの社会生活に何らかの影響を与えるのではないか」とし、この問題意識を追究するために若者の顔に対する意識や行動の変化についてアンケート調査を実施した。

### 2. 研究の動機、目的

本研究の目的は、Covid-19 の流行後に日本の大学に通う若者を対象とした調査を実施し、顔に対する自意識の変化が今後の彼らの社会生活に与える影響について考察・提言を行うことである。最終的には社会全般に向けた教育的な提言を行うことを目的とした。

### 3. 研究の結果

本研究の結果、被験者らの容姿に対する考えには性別間で有意な差が生じていたことや、顔だけでなく身体イメージに関する意識も変化していることを明らかにした。更には Covid-19 の流行前後で、大学入学年度ごとに自身の容姿やマスクの着用行動に対する有意差が生じていたことも明らかになった。これは性別に留まらず、コロナ禍の社会情勢に影響を受けた学生たちによる行動や認識の差異を明らかにした結果であるといえる。また、容姿というのは人を構成する一つの要素ではあるが、それがすべてではないことを大学教員や学生の周りの大人が理解し若者に教示しなければならないという見解や、マスクを着用する自由を認めること

は多様性の尊重になるが、就職活動などの場面で人に顔を見せられないといった学生が今後出てこないよう、マスクを外した表情も互いに尊重し合うべきであるという提言を国際学術論文・国際会議で報告した。

#### **4. 研究者としてのこれからの展望**

今後も若者の容姿に対する認識や行動について研究を続けると共に、美容整形手術に対する認識やその経験の有無などからヒトの意識や行動についての探究を重ねていく予定である。また、容姿に対する意識や行動だけでなく、日頃の生活から湧いてくる「なぜ?」「どうして?」といった疑問に誠実に向き合い、大学という場で若者を中心とした社会の諸課題を解決することの出来る指導者・研究者でいることが今後の展望である。

#### **5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ**

年間 40 万円という研究費は我々研究者にとって大変貴重な資金であり、また私学事業団殿においては若手研究者や女性研究者のユニークなテーマにフォーカスして研究支援をされています。そのことから、本当に自分が興味関心を抱いているテーマについて研究することが出来るため、研究者の方にはぜひ資金獲得に向けてトライして頂きたいです。また、寄付企業の皆様におかれましては、この度のご支援に心からの御礼を申し上げます。研究を通して社会の諸課題を解決するという研究者としての使命を果たすことが、自身の職責であると痛感しております。重ねてこの度のご支援に感謝申し上げます。2023 年度は研究支援のおかげで、国際的な場面に向けて有用な実績を残すことが出来ました。大学教員として教育はもちろんですが、今後も研究や論文執筆を通してその成果を一般社会に還元できる研究者であり続けていく所存です。